

モラル・ラック（道徳的運）試論  
（たとえ運に左右されようとも・・・）

金沢大学名誉教授  
柴田正良

道徳的行為者のロボットの構築による  
＜道徳の起源と未来＞に関する学際的探究」（基盤研究(A) 19H00524)

2023 年度第 2 回科研費研究会  
於:JAIST 金沢駅前オフィス

7 月 29 日

以下の内容は、当日の参加者、とくに柏端達也氏（慶応大学）との議論によって、当日の発表に加筆修正を加えたものである。

話の組み立て

1. モラル・ラックが生ずる前提
2. 行為功利主義の場合
3. 規則至上主義の場合
4. 自由至上主義の場合
5. 行為評価のめくるめく転変
6. モラル・ラックという考え方が示すもの
7. おまけの話

1. モラル・ラックが生ずる前提

T.ネーゲルは、道徳的運の出現の様相を大まかに 4 つに区分しているが、その境界は、場合によっては明確に引けないようである。第 1 は「構成的な運」、第 2 は「環境的な運」、第 3 は「行為の原因に関する運」、第 4 は「行為の結果に関する運」である。第 1 の「構成的な運」は、おおむね行為者の身体的もしくは心的要因であって、ここには性向や資質、気性なども含まれる。第 2 の「環境的な運」は、行為者がどのような問題と状況に置かれてきたか、またいま置かれているか、といったことに関わる。第 3 の「行為の原因に関する運」は、行為が先行する状況にどう左右されたか、つまり同じタイプの行為であれ異なりうる偶然的な先行条件に関わる。第 4 の「行為

の結果に関する運」は、行為が引き起こした結果が行為評価をどう左右したか、に関わるものである。これは、1つの行為に対する道徳的評価の事後的な変化に関わるもの（カテゴリー①としよう）と、同一タイプの2つの行為に対する道徳的評価の事後的な相違に関わるものである（カテゴリー②としよう）。

このうち、本試論では、最後の「行為の結果に関する運」だけをもっぱら取り上げることにする。

さて、なされた行為の正しさや妥当性といった評価は、通常、行為遂行が終了した時点で定まる。では、行為の遂行はいつ始まり、いつ終わるのか。ここでは当面の問題をはっきりさせるために、これまでの行為論で議論となったアコーディオン効果や、基礎行為と高次行為との関係などは、考慮しないことにしよう。したがって、かなり素朴な語彙で個別化される諸々の行為の常識的な開始と終了が前提されれば、それで良いことにしよう。ポイントは、そのような個々の行為と、それが引き起こした結果とが異なった2つの出来事として区別される、ということである。

例えば、路上でタクシーを止めるために手を挙げる。〈タクシーを止める〉という行為は、この場合、手を挙げるという単純な動作で完結する。うまくすれば、結果として20メートル先から来るタクシーが目の前で止まる。あるいは、夕食にチキンカレーを作る場合なら、多少の野菜を切ったり、鶏肉を炒めたり、鍋にそれらを入れてカレールーを溶かして煮込んだり、といった幾つかの要素的行為となる一連の動作が、〈チキンカレーを作る〉という行為を構成するだろう。この場合、この行為は、具材の下準備をする時点から始まり、たぶん鍋の火を止める時点まで続くだろう。この行為の結果は、チキンカレーの出来上がりである。もっとも、日常的な行為にしてもこんな単純なものばかりではない。もっと複雑に構成され、他者の行為を含み、終了まで何年にも渡るような行為もあるだろう。

そこで、ここでの問題を改めて述べよう。カテゴリー①の場合、それは、行為遂行の時点でその行為に対して定まった道徳的評価が、その後のたまたまの状況の変化によって覆される、という可能性である。あるいは、カテゴリー②の場合、ある1つの行為に関する道徳的評価の（時間的に隔たる）変更ではなく、むしろ（可能世界的に隔たると言った方が分かりやすい）2つの同一タイプの行為が（各可能世界での）たまたまの結果によって、それぞれの道徳的評価を異ならせる、という可能性である。

例えば、カテゴリー①の場合。妻子を捨ててタヒチ島に渡った画家ゴーギャンの行為は、「道徳的に責められるべきもの」といったん評価されたが、その後の彼の大成によって、その評価がキャンセルされ、むしろ「道徳的に許されうるもの」だと評価を変えた、とされるかもしれない。この場合、ゴーギャンが絵画で成功を収めたのは偶然のことであり、たまたま彼は幸運（luck）に恵まれたのにすぎない。彼が惨めな画家として一生を終えたとすれば、「道徳的に責められるべきもの」という当初の行為評価はそのままだったであろう、というのである。

カテゴリー②の例。可能世界Aにおいて、あるトラック・ドライバーは、住宅地の道路を時速80キロで走行したが、早朝だったせいか通行人もほとんどおらず、事故を起こすことなくその住宅地を走り抜けた。この住宅地の道路の速度制限は時速50キロであった。しかし、可能世界Bでは、このドライバーの走行によってたまたま通行人の一人が大怪我をし、翌日に死亡した。この点でのみ、A世界とB世界は異なるでしょう（もちろん両世界には、この相違が生ずるための最小限の違いもあるが、ここでは無視してよい）。A世界のドライバーは、速度違反を褒められることはないだろう

が、このことの「道徳的な罪はそう大きくはない」と見なされるかもしれない。結果として、幸運にも何の事故も起きなかったからである。それに対して、B世界のドライバーは、死亡事故を引き起こしたがゆえに、「道徳的な罪はそう大きくはない」どころか、事故当初から「道徳的に厳しく非難されるべきもの」とされるだろう。同じ速度違反でありながら、B世界では、不運にも通行人を死なせてしまったからである。

このように、モラル・ラックという考え方が実は一般的で、なおかつ妥当ならば、行為時点での行為の道徳的評価がいったん定まったとしても、実はそれが最終的なものではなく、後の状況変化、主にはその行為が引き起こした結果によって、遡ってその行為の道徳的評価が左右されることになる。あるいは、まったく「同じタイプの行為」なのに、たまたまの結果の違いによって道徳的評価が異なる場合がある。あとで見るように、恐らく、「結果よければすべてよし」という言葉に込められた庶民の感覚は、道徳的な厳格主義に対する違和感と無力感の現れではないだろうか。救いがたい大惨事を結果として招来した行為に対しては、行為時点での一般的な評価がどうあれ、あるいは結果が許せる同じタイプの行為と比較して、「道徳的に許しがたいもの」だったという非難の声が上がるだろう。

## 2. 行為功利主義の場合

ところで、行為遂行以降の状況変化によって当初の道徳的評価が遡って変更される、という一般的な構図には、注意すべき点がある。それは、そもそも評価を左右すべき観点として、状況変化のどのような要素を考慮するか、ということである。この点は、カテゴリー①の場合でも②の場合でも同じである。つまり、再評価を含め評価の観点は、一貫して、評価者がどのような道徳的原則を採るかに依存するのである。例えば、功利主義的な原則、しかも極端な「結果主義」としての「行為功利主義」の立場に立つなら、もともと、いかなる行為の評価も行為遂行時点では定まらない。評価が定まるのは、その行為が引き起こした善悪の結果、この場合は生み出された「快の総量と苦の総量の差し引き」が定まった時点である。快の総量が勝れば、その行為をなしたのは行為遂行の時点で正しかったのであり、そうでなければ正しくはなかったのである（快苦が拮抗する場合は、正でも不正でもないのであろう）。このとき、行為の時点で、行為者個人が最善だと確信した判断に基づいて行為したのであろうと、あるいは客観的にもその判断が最善だったのであろうと、関係がない。逆に、最善ではないと思いつつ行為したのであろうと、行為の最終評価には関係がない。つまり、第一次的には、この極端な結果主義を採る行為功利主義の場合は、そもそもモラル・ラックという構図が当てはまらないのである。なぜなら、この立場においては、後にキャンセルすべき「行為遂行時点で確定した行為の道徳的評価」なるものが存在しないからである。もっとも、カテゴリー②のモラル・ラックは生じる可能性はある。とはいえ、この立場では、結果から切り離された「行為自体」というものはそもそも道徳的評価の対象とならないので、同一タイプの行為でありながら道徳的評価が異なるのは、当たり前なことであろう。つまり、モラル・ラックという現象の「違和感」も「衝撃」も、この限りでは、無いに等しいであろう。

## 3. 規則至上主義の場合

では、カント的な義務論、つまり規則至上主義の立場で考えてみよう。ある行為の遂行時点で、その行為が道徳規則に合致しているかどうかは、行為者や関係者が最善の判断をしようがしまいが、客観的に定まっている。しかし、モラル・ラックが生じ

るとすれば、その後の状況の変化によって、当初の道徳的評価はキャンセルされて、その行為に別の新たな評価が下される。この場合、状況の変化の内容は、快苦の差し引きの変化などではない。この行為が最終的にどのような快苦を人々に生み出そうと、それはこの行為の道徳的評価に関係がない。問題となる観点は、道徳規則との合致だけである。もし規則至上主義が道徳規則の永遠性、つまり「道徳規則は未来永劫に定まっています、いかなる修正もありえない」という立場を採るなら、いったん道徳規則に合致した行為が後にそれに合致しなくなった、という状況変化を考えるのは難しい。この場合は、そもそもモラル・ラックは生じないであろう。したがって、もしもモラル・ラックが実際に生じると考えるなら、道徳規則は時代や社会の変化と共に変化しようということを認めざるをえないだろう。例えば、以下を道徳規則と呼んでいいのかわからないが、ある古代社会で「近親相姦」は道徳的に許されていたが、ある時から道徳的に許されなくなった、としてみよう。すると、この道徳規則のたまたまの変化によって、当初は道徳規則に合致していた行為は、後に「本当は」道徳的に許されざるものだったのだ、と評価を変えるようになるだろう。これが、規則至上主義者にとってのモラル・ラックの可能性の一つだと思われる。また、カテゴリー②の状況想定にもとくに問題はないであろう。

#### 4. 自由至上主義の場合

最後に、自由至上主義の場合はどうか。ある行為の遂行時点で、その行為が行為者自身の自由を最大限に実現するものであるかどうかは、行為者や関係者が最善の判断をしようがしまいが、客観的に定まっている。しかし、モラル・ラックが生じるとすれば、その後の状況の変化によって、当初の道徳的評価はキャンセルされて、その行為に別の新たな評価が下される。この場合、状況の変化の内容は、快苦の差し引きの変化でもないし、道徳規則との合致の程度でもない。問題となる観点は、行為者自身の自由の実現だけである。もし行為者の自由の実現が他者の自由を制限する内容（他者危害）を少しでも含んでいるなら、その行為の道徳的評価は最高点には達しないだろう。しかし、他者の自由との調整は程度問題であり、調整不可能な場合、つまり他者の自由の抹殺となる場合は、その行為は「道徳的に許されざるもの」となるだろう。したがって、自由至上主義においては、その行為が、後の状況変化によって、行為者の自由実現の程度を上昇（／下降）させるとか、あるいは他者の自由を阻害する程度を上昇（／下降）させるといった結果を生じさせた場合に、モラル・ラックが生じることになるだろう。例えば、ある雑誌記者は、当時の冴えない三流政治家の悪趣味を暴いて、その政治家の目に触れない形で、バカバカしい内容の記事に仕立て上げた。しかし、あろうことかその政治家は後に大変貌を遂げ、国の強権的な独裁者となった。その記者の愚かな記事は独裁者の知るところとなり、記者も関係者も投獄の憂き目に遭うことになった。その記者の当時の行為に関する道徳的評価（愚行権の行使）は、後の自由制限をたまたま招来したことによって、遑って「本当は」道徳的に非難されるべきものだったのだとされるだろう。これが、自由至上主義者にとってのモラル・ラックの可能性の一つだと思われる。また、カテゴリー②の状況想定にもとくに問題はないであろう。

#### 5. 行為評価のめくるめく転変

先に、行為功利主義は第一次的にはモラル・ラックを生じさせない、と述べた。それは、結果が定まった時点で＜初めて＞行為の道徳的評価が定まるからであった。し

かし、この評価は、その後の世界の状況変化によって覆される、ということはないのだろうか？ 論理的には十分にありうる、というのがその答えであろう。もはや具体例を案出することは省くが、世界の状況変化によって、t1の時点で定まった快苦の総量の差し引きが、後のt2の時点で変化し、遡ってt1における行為評価を覆す、ということは可能であろう（ただし、これらの状況変化は、すべてt0における〈初発の行為〉の遠い結果であるが…）。とすれば、このような仕方であれば、行為功利主義の場合ですら、モラル・ラックは生じることになる。

しかし、このことは不吉な論理を呼び覚ますだろう。評価されるべき行為は、あくまで時点t0でなされた行為である。その評価は時点t1でようやく〈初めて〉定まる。しかし、それは、更なる世界の状況変化によって、t2、t3…の時点で何度でも変更されうる。では、一体、行為の最終的な道徳的评价（本当の評価？）は、いつ定まるのか？ 世界に終末があるならば、ようやくその時点では定まっているだろう。言い換えれば、世界の終末までは、行為の道徳的评价が決まったとは言えないのだ。しかし、世界に終末がなかったならば？ あるいは世界が、ニーチェの言うような永劫回帰の時間展開をするものだったならば？ それぞれ、「不定」および「振動」と言うべきだろうか？

この苛立たしい顛末は、残念ながら、行為功利主義の場合に限らない。規則至上主義の場合でも、自由至上主義の場合でも、モラル・ラックが生じるとしたら、当初の評価を覆して定まった第二の評価も、さらにその後の世界の状況変化によって覆されることがありうるだろう。不吉な論理の展開は同じである。このめくるめく行為評価の転変を、われわれはどう考えたらいいのだろうか？ もしあなたが時点tmで先立つ行為評価の変更を経験したとしよう。しかし、あなたは同時に、その評価が後の時点tnで更に変更されうることを知っている。あなたが到達した時点tmでの行為評価に、あなたはどんな意味を見出すことができるだろうか？

以上とは別の観点から見れば、これは逆に、モラル・ラックが原理的に生じえない規則至上主義、つまり道徳規則の永遠性を謳うカント的立場が最も優れている、ということの示唆だろうか？ しかし、この立場がおおよそ行為の結果に無頓着な天上人の倫理だということ、つまり、そもそもなぜ人が行為によって因果世界を変えようとするのかを理解できない倫理学者の主張だ、ということをおぼろげに思い起こそう。モラル・ラックの「不発」が何と引き換えになっているのかを冷静に考えれば、答えは自ずから明らかであろう。

## 6. モラル・ラックという考え方が示すもの

さて、以上のようなモラル・ラックの可能性は、われわれに一体何を示しているのだろうか？ それは、一言でいえば、われわれの世界（現実世界）における道徳というものの脆さ、不確実さ、無力さに他ならないように私には思われる。

結局のところ、どのような道徳原理、道徳原則に従って行為しようとも、モラル・ラックは生じうるだろう。たとえ行為者本人が自らの従う原則に最大限合致した最善の判断を行い、その判断に従って行為したとしても、自分にはどうしようもない状況の変化によって、その最善の行為は「別様に行為すべきだった」と当初の道徳的评价を覆されてしまうのだ。なぜ人は、そのような道徳的评价のキャンセルと変更を認めてしまうのだろうか？ それは、当の行為が道徳的にどう評価されようと、人々にとって大事なのは実際に出現した世界の状況だからである。その状況が善ければ、それ

を導いた行為は一般に人々に祝福されるだろうし、悪ければ人々に唾棄されるだろう。それに抗して、当の行為の道徳的評価だけは頑固に固定されるだろうか？ 何のために？ たとえ最善の道徳的評価を勝ち得た行為でも、たまたま悪しき結果をもたらすこともある。また逆に、最悪の道徳的評価であった行為も、たまたま善き結果をもたらすこともある。それが「常に」ではないにしても、「ままたまある」とするならば、そもそも行為をもっぱら何らかの道徳的考慮に従ってなすことに、どれほど重要な意味があるのだろうか？ 行為の道徳的指針（原理・原則）の結果が不確かであるなら、それにしがみつ়くことは余り賢明ではないかもしれない。結局、運任せがいつもの成り行きなら、どうして自らの道徳的指針をそれほど気にかける必要があるのだろうか？ あるいは、世界の状況変化を完全に制御することはわれわれの手に負えないので、道徳的な評価の方を事後的に変えることで、まるであたかも道徳的な行為指針が世界の変化に対して有効であったかのように、辻褄を合わせようとしているかに見える。

なぜ道徳に対するこのような軽視、無力感、嘆きが生ずるのかと言えば、道徳的な原理も道徳的な概念も、物理的に決定されたわれわれの世界の客観的特徴、とくに出来事の因果連鎖を正確には捉えていないからである。これは、道徳に関する反実在論の証左でもある。人がモラル・ラックを認めざるをえないと感ずるのは、道徳なるものに対する抗議の念からでもあろう。あるいは、世界の物理的因果構造と道徳との乖離に対する苛立ちからでもあろうか。それは、道徳なるものとそれを実現する道徳システムがあったとして、世界はどれほど道徳的になるのか、という根本的な懐疑でもあろう。

もし私が主張するように、道徳とはそもそも自分の自由と他者の自由との調整の道具にすぎず、したがって道徳なるものはできるだけ出番がない方が望ましい、ということが本当ならば、モラル・ラックが生じない次のような可能世界を考えることができる。そこでは、各行為者の自由の実現は、その世界においてなぜか他の行為者の自由と衝突しないような仕方で「常に」生ずる。その世界の「神のような存在」が、すべての行為者の自由実現を、その世界の始まりから終わりまで予定調和のように保証しているからだ。そこでの各人の「自由」とは単に「自分が欲求することを行う」という自由だが、「他者の自由を損壊したい」という欲求は、その予定調和の一環として、誰も持てないようになっている。ここで、自由至上主義に従った行為者が（客観的にも）最善となる判断の結果として、ある行為をなしたとしよう。この世界の予定調和的構造によって、それが後の偶然からモラル・ラックに襲われる心配はない。そもそも自分の自由を他者と調整する必要もない。つまり、自由至上主義者にとって、この樂園のような世界には道徳なるものが存在しないも同然である。

だが、もちろん、われわれの現実世界はこんな予定調和の支配する世界ではない。われわれの世界を支配しているのは、決定論的な物理的因果連鎖である。そこで、われわれの望みと世界の実際の状況とのミズを、どうやって埋めたらいいのか？ 先の予定調和的可能世界において、そこの「神」が、突然に意地悪くなり、われわれの行為に関する（客観的にも）最善の判断と世界の状況変化を合致させなくしてしまったとしてみよう。例えば、それによってモラル・ラックの生ずる可能性は、70%か、それ以上の割合になったとしてみよう。われわれは、神々の気まぐれに運命を弄ばれるギリシャの神話世界に住んでいるようなものかもしれない。そのとき、道徳なるものはまったく無益なものとして、完全に人々の念頭から忘れ去られるだろうか？ そうではなかろう。その時になお残るのは（自由至上主義の場合）、「たとえ運に左右されようとも、自由を最大限に実現するよう自他を調整しよう」とするわれわれの意志と

知恵ではなからうか？ 世界がそんなに「いい加減」であっても、われわれにできることはある。幻想のシステムであっても、道徳なるものは人を動かさう。幻覚が人を闇や光の場所に導くように。

われわれの現実世界は因果的に決定された物理世界であろうが、その中で、われわれはまったく無力だろうか？ そうではない。むしろ、因果的な決定性が支配する世界であるがゆえにこそ、われわれは、限界があるとはいえ、日常世界を自由に改変することができる。魔術や奇蹟によってではなく、因果連鎖のステップを一つ一つ踏むことによって、望みの結果を得ることができるのだ。なぜなら、物理的な因果決定性という「存在論的真理」は、破られることもない代わりに、あくまで「日常の背後」に留まるからである。

われわれにできること、それは、挫折しつつも、常に、妥当と思われる新しい調整の作法、新しい道徳システムを提案し、修正し、再提案することである。たとえ、いかに理不尽な世界においてであろうと…

-----  
7. おまけの話

さて、モラル・ラックが生じうる、以上のそれぞれの場合において、行為の当初の道徳的評価と事後の道徳的評価は、同じ評価の観点からなされていた。つまり、功利主義的な道徳評価の場合は、事後の結果に関して「快苦の差し引き」という功利主義的評価が行われ、規則至上主義の場合は「規則との最大限の合致」という観点からの評価が、そして自由至上主義の場合は「自由の最大限の実現」という観点からの評価が行われていた。しかし、当初と事後の評価の観点がズレることはないのだろうか？

そもそも、モラル・ラックという概念がそう「律儀なもの」ではなく、かなりルーズなものだとしてみよう。そして実際、道徳哲学者や倫理学者を除いたふつうの人々においては、モラル・ラックを厳格に考える感覚は余りないのではなからうか？ 先にも引いた「終わりよければすべてよし」と言われる場合、この「終わりよし」がどういう点で「よい」状況なのかは、かなりいい加減ではなからうか？ つまり、それは、何らかの観点で「よい」状況だ、というだけで十分なのではないか？ したがって、例えば、規則至上主義者が自分の最善の判断に従って始めた行為が思い通りの結果にならなかったとしても、つまりたまたまの状況変化により規則との合致が期待ほどには得られなかったとしても、その状況が功利主義的には喜ばしいものであったとしたら、人々の感覚においては、やはりモラル・ラックは生じるのではないだろうか？ 自由至上主義の場合も、同様の状況を考えることができるだろう。たとえ自由の実現が挫折しようと、これまでにない多くの富が人々にもたらされたなら、その当初の行為は「正しい行為だったのだ」と評価を変えるだろう。

考えようによっては、人々に祝福される状況はどのような道徳的観点であってもいいのだ（あるいは、結果が呪わしい場合、どのような道徳的観点で忌避されてもいいのだ）。「終わりよければすべてよし」（あるいは「終わりダメならすべてダメ」？）。裏を返せば、この「終わり」に至るまでの道徳的行為ルートなどどうでもいいのだろう。こう考えると、これほど、道徳的な方針や概念をバカにしたものもないかもしれない。つまり、究極のところ、モラル・ラックとは、道徳的な原理・原則に対する最強の狡猾な破壊者かもしれないのだ。

しかし、この「ぐちゃぐちゃ」のモラル・ラックに対しても、自由至上主義者はなお、状況のいかなる変転にも耐えつつ、「自由を捨てるくらいなら、死を選ぶ」、という方針を貫くことはできる。